

小説とはなにか。
想像力は現実と
どのようにかわるのか。
現代日本文学の旗手が説く
小説の深部。

新編
小説入門

井上光晴

新編
小説入門

井上光晴

井上光晴 (いのうえ みつはる)

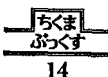
1926年、中華人民共和国の旅順(当時、満州)に生れる。1945年日本共産党長崎地方委員会の創設に参加、翌年1月、日本共産党員となる。1946年『新日本プロレタリア詩集』(九州評論社)を編集、長詩「飢え」を発表。1949年大場康二郎と共著で詩集『すばらしき人間群』刊行。新日本文学会員となる。1950年、「書かれざる一章」を「新日本文学」に発表。1953年日共を脱党する。以後、新しい日本文学の担い手として多数の作品を発表し、現在にいたる。

〔主な著書〕「ガダルカナル戦詩集」「地の群れ」「他国の死」「心優しき反逆者たち」「未青年」「ファシストたちの雪」ほか数多い。

新編小説入門

1979年4月25日 初版第1刷発行

Printed in Japan



著 者 井 上 光 晴

発行者 関 根 栄 郷

発行所 株式 筑 摩 書 房
会社

101-91 東京都千代田区神田小川町2-8
振替 東京6-4123 電話 東京(291) 7651(営業)
(294) 6711(編集)

目次

I 昼も夜も 2

文学伝習所の日々 20

II フィクションの問題 40

なぜ廃鉞を主題に選ぶか 60

崩壊・風化した故郷 63

死者も生者も被爆者 69

佐世保橋 73

狂気みなぎる現代 77

香具師と口上 81

裁判劇をつぶやく老人 85

病み犬を連れた老婆 89

尋問のヘリアリズム 93

辺境——根拠地へ 104

心優しき者たちは 119

フークナーと私 128

Ⅲ 官僚「社会主義」とファシズム下の表現 148

真実へ向う抵抗と告発 162

Ⅳ 観念の苦痛と現実の重さ 182

詩的遍歴と現在 196

虚構と原体験 208

I

昼も夜も——文学の「伝習」は可能か——

文学伝習所とは何か。正直にいつて私はこれだという定式を示すことはできない。むろん私なりの考えを持っているが、それを集まってくる人々に押しつけられはしないし、彼等の求めようとするものにならずにたえなければならぬのである。

人間と文学、或は現実と虚構の關係を夫々の原体験を通じて手探りして行く場。恰好よくいえばそういうことになるうが、元々体裁と形式に捉われぬところから出発したのだから、氣取ったいい方をする、と忽ち性根を見失ってしまうのだ。

生き方と書き方の両立と矛盾。その狭間に身をおきながら、明日への想像力をできる限り養おうとするのだが、ひとりひとりの資質と条件によって、それを目差す道程には、はかり知れぬ困難が横たわっている。

当然そこには、文学の「伝習」は果して可能か、という根本の問いが据えられており、なまじつかな言葉はすべて宙に浮いてしまう。去年の夏と今年の春、九州西域の地における文学伝習所はすでに一、二期生をおくりだしているが、彼等ははるばる何をつかもうとしてやってきたのか。

伝習所の募集要項には、申込書に合わせて『私について』という四百字一、二枚の短文を課しているが、地下道の迷路にわけ入り、閉ざされた鉄柵を押し開こうとするエネルギーは、隠しようもなくあらわれていよう。

「私は幾度も職業を変えた男です。当然私は幾度もボスたちを前にして、私について、語らされた男でもあるのです。

幾許かの金銭を、面接試験、首実検に感じた屈辱の記憶をともしして給料日に私は得る。

私が、私について、利害の感情なく語り得る日は私の解放の日でもあることでしょう。

風化した私の感情。私よ私。私について語らねばならないと云うのに、永い間語りたいと欲していたはずなのに、何故か今朝は気がのらないのです。

もしかしたら、久しぶりにオールドの水割を昨夜飲んだからかもしれない。サントリーオールド色の霧の中で今、私は煙草をくわえて歩み始める。

サセボへ。

工員、二十四歳」

「おまえたちは同じ兄弟なんだ。

病院のベッドの上で、うわ言のようにぼつりといって父は冷たくなった。父が死んで、二〇年振りに顔を合わす兄と弟。お互に話しかける言葉もなく、長い間避けてきた記憶の糸をさぐりあう。

薄くかすんだ記憶のかなたに、ぼんやりと兄は立っていた。村の子供たちが『氣違い。氣違い』とのしりながら遠くから石を投げている。石が鼻に当って血が流れたすと、子供たちは笑いながらすすすす近づいて石を投げ続けている。兄はそんな子供たちをしかるでもなく、流れ出ている鼻血も一向に構わず、うつむいたままにやりと笑った。異様に光る見開いた瞳孔と鮮やかな紅色の唇。その脇を他人のような顔をして私は走り去った。

工員、二十五歳」

「高専時代、四年中退を決意してそこでの最後となるはずであつた一年間を、学内運動に賭けて必死であつた秋に母が死んだ。

……生活を脅かす情況の中で、ひたすら生きる余裕しか持てなかつた名も無き人々の存在を忘れた地平での、あらゆる運動の不毛性を、上京後の生活の中で私は知つた。

無職、二十三歳」

「口の悪い友だちは、プチ・ブル的ベシミスト」と私のことを言う。確かに人生のレールの上を走つていながら、無軌道な道をあこがれ模索している。所詮、こわくてレールを踏みはずせないのを知つていながら。

しかし、医学生として生の人間の現実存在を考えさせられることは多い。

癌……確率論的恐怖。

癌細胞に体の一部を占領され、やがては生命もその巨大なエネルギーに吸い取られるであろう患者の目には、まさしく生き様と死に様が交錯し、死に様に集約されようとする姿がある。

学生、二十三歳」

「好きでつき合つてゐる訳じゃない。誰にも言うなよ、お前は親友だからな、そう言つた。謝恩会準備を舞台の陰にさぼりに入ると先に居た。オレはあいつの友達なんて思つてないし、中学行つてもつき合いたい、なんて困るんだよ。クセエし、さからうとやられそうだら、先生はしつこく頼むし仕方ないだら。オレのおかげで良くなつただなんて無責任過ぎるよな。最後の道德の時間、本人が居ないからと言つて先生はあいつの作文を読んだ。自分が変つたのは友達のおかげだと書いていた。成績が少し上つたけど、皆からあいつと同じに見られるのがイヤでさ、でもうまくやらなきゃな、とささやいた。僕は何故彼が

内訳話をしたのか、そんなつき合いをしたのか理解出来なかったが、うなずいた。そして、お返しとして、僕の内緒事を話し、秘密を分け合った。自分はある頃とあまり変っていないかもしれないと今でも時々思い出す。

地方公務員、二十四歳」

「五体の中で常に口は最大の感覚であった。感情が激すると一そう言葉が出難くなるが、子供の頃から、そのことを知りつつもよく腹を立てたり、わめいたりした。ものごとを筋道立てて云うのは、息苦しい作業であるのに、泣き、笑い、歌い、わめき散らす時は奇妙にすらすら声が出た。無職、五十一歳」

「最近の実施設計まで進む仕事がない為に、製図台の上には読みかけの建築雑誌やら、スケッチ段階のトレーシングペーパーが乱雑に散らばっている。南に面した私の前に隣家の屋根が迫っている。丁度その時刻は、白く鈍く、屈いだ海面のように照り輝いている。ここ一年余りの習慣でそんな屋根の照り返しを見つめながら、イランで働いているKのことを想う。『昨年の12月15日は30cmもの積雪あり、この雪だけが正月を思う唯一のものです』と、彼からの便りにあった。娘の教育が心配だと言って三年前に家族を連れて彼の地に行った。日に焼けた彼の顔が浮かぶ。事務所を辞めてから毎日私は屋根上の海面に遊んでいますと書いたら、彼はいったいどんな顔をするだろうか。そんなことを思いながら筆をとる。目の前の海面も次第に光を失いはじめてきた。

建築設計業、三十一歳」

「『職業は』と聞かれると私はいつもどぎまぎとしてしまいます。

『機織りです』とはっきり言えばいいのですが、なかなか言葉が出て来ず困ってしまいます。機織りの収入だけでは生活が出来ず、今もって親に面倒をかけているのです。

その恥ずかしさ、後めたさが、先に立って言葉にならないのです。

機織りを始めて二年半余り、糸という素材を使って人間を表現したいと思いながら、私自身何程人間をしているのか、私の力でどれだけ表現出来るのか、考えれば考える程糸が絡みついて、機を見るのも辛くなり、頭の中を、紙の上を真黒に塗潰してしまふのです。

お店という舞台に立ちながら、不評の為ダンボール箱に押し込められた私の仲間たち。

私も箱の中から飛び出したい。

機織り、二十九歳」

「身の丈、一五〇に一センチ足らず、重さ、四十キロに達することのない肉体を持つ。左肺、鎖骨の下に鶏卵大の空洞化あり。四箇月に一度の割りで痛む膀胱とつき合うようになってここ数年、血尿時の激痛にきまって思うこと。すべての欲とひきかえにこの痛みからのがれたい」と、あとは涙……。

痛みが遠のくと、うごめく四十女の欲情はカラスのくちばしでつつかれる。教員、四十四歳」

「この間まで私の前の方には光りが少しも射して来なくて、今までもずうとそうだったし、このままだろうなあと思い込んで居た。

それがこの頃になって影絵のような草だらけの道に、月の雫か、夜明けなのか、ほんのり明るみが見えた。あれは何だろうと今立ち止まっている。

それはお前、希望だよ。四十歳近くなった、ぺいぺいの労働者がか。

会社員、三十八歳」

「俺あ、頭が悪いもんでよ。皆にバカにされるだよ。ほんでも、この世に出て来た以上はバカなりにやらにやなあ。物を観てもあんまり感動せんし、考えごとしているとすぐ、眠くなっちまやがる。俺あ、

もう三十七歳だ。嫌になっちまうよ。主体的時間の軌跡って奴をなあ、とどめにやららん。焦っとるわけよ。どうも俺の話は内方から内方へと向っていけねえなあ。あと三年で四十か。内でも外でもかまわん、俺の焦りを告発する」

国鉄職員、三十七歳」

端的に言えば、そこに寄せられたひとりひとりの内面こそが、不分明な文学の要素であり、彼等の生きる日々を潤渇させている彼等の精神の飢えなのである。

決して嘘をつかない人間が、なぜくらしにくいのか。突然牙をむきだしにした兄の狂気に自己の愛までも犠牲にしなければならぬ不幸。夫に依存して行くだけの生活がつくづく嫌になった三十九歳の主婦。無気力と無感覚にさいなまれながら、ひたすら日記をつづけることのみに生甲斐を覚える中学の女教師。同人誌に発表し始めてからかえって小説を不可解な怪物だと考えるようになった企業労働者。大学の教師も親も、友人たちのすべてを信用しないという張り詰める若者。

そこに提出されているさまざまな実存は、文学よりもむしろ宗教や哲学の領域に属するものかもしれない。しかし彼等が生き方を想像力に托す以上、それに答えなければならぬのだ。

伝習生の中にはまた、小説の技術、表現の方法を主眼に学ぼうとする人々が半ばをしめており、水準もまちまちなのでその点にも充分心を配っていなければならぬ。政治と文学の初歩的な問題から、サルトル、カミュ論争に至るまで、各人各様の質問をあげせられるのだ。いわば朝市の露店とスーパーマーケットを同時に経営しているという感じなのだが、しかしその点をあまり気に病む必要はない。倉庫にない品物は売れず、知らないことは知らないというしかないからである。

たとえば次のような質問がでる。

「『私』という一人称で書く場合、どうしても現実の私自身とこんがらがってしまう。ストーリーイが思

うようにのびていかない。自分のことのように思われはしないか。作者が実際に経験したことだと受取られはしまいか。そういう危惧がつけまとう。どうすればいいか」

作中の〈私〉と作者とは異なるのだから、そんなことにいちいち思い惑う必要はない、と答えても仕方がない。それをわかった上でその人はたずねているのだから。そこで説明は自ら本質的にならざるを得ないのだ。アラン・シリトーの小説に登場する「わたし」と作者自身の関係、自作の短篇『妊婦たちの明日』の主人公である「私」など例にあげながら、納得の行くまで分析しつくすのである。

それまで幾篇かの作品を同人誌や商業誌に発表した経歴を持つ伝習生のひとりは、作中の視点に執拗にこだわっていた。所謂「モーリヤック氏の自由」を批判したサルトルの理論を踏まえた上での方法に對する疑問である。

野間宏の『サルトル論』の冒頭で説明されている「小説論」はいわばこの問題を中心に展開したものだ、そこに述べられている論理をわかりやすく咀嚼した上で、伝習所ではさらに実作をあげて具体的に例証しなければならぬ。私の苦心と苦労はむしろその点にかかっているように。

とにかく、どんな小さな単純な言葉にも、根本のところでは対応しなければならず、それこそが「伝習」の核なのである。

登場人物の名前のつけ方について、名案があったら教えてくれという地方公務員もいた。名案というわけではないが、私は自分の方法をそのまま伝達する。

「去年の六月、私は旭川に行きました。北海道の旭川です。仕事を終えて少し余裕ができたので網走行きの列車に乗りました。何時間位乗ったのかな……眠くなったので、列車が停まったのもかまわず、うとうとしていると、えんがるう、えんがるうという駅の名前を知らせるスピーカーの音がきこえてきたんですね。何だかきいたふうな名前だなあと思いつながら、そのうちにはっと気付きました。えんがると

いうのは遠軽と書くんですが、旭川から網走に行く途中のオホーツク海寄りにある町です。木材や農作物の集積地のような感じで、私も初めて見ました。……そこでなぜこの遠軽という名前を知っていたかという、私が自分の小説の登場人物につけた名前だからです。現在『すばる』に『憑かれた人』という小説を連載していますが、その中で主人公の北森維時と関係してくる主要な伏線の人物として登場するのが、遠軽道太郎という男です。北森維時は戦争中、佐世保港外にある海底炭鉱に働いています、その炭鉱に働く坑夫たちに人間の生き方を説く予言者で、ひそかに『いのち紙』というお守りを配布しています。……

遠軽という名前はさっきもいったように北海道の地名ですね。小説に使う名前を決める時、私は何時も地図帳を開きます。九州から北海道まで行き当りばったりに開いて、山脈や河川を辿りながらこれという名前を探しますが、オホーツク海を河口にした湧別川をさかのぼって行くうち、遠軽に出くわしたんですね。……

ついでにいうと湧別川の湧別も、登場人物としてはちよいとした名前になるでしょう。近辺にも安国とか生田原などがでていて、この川を上ぼるという発想はなかなかのものです。人の名前に限らず部落や村にもこの方法は有効です。『階級』という小説の舞台に慈眼廃鉱がでてきますが、これも九州の平戸島にある慈眼岳から採用したものです。

もうひとつ名前のつけ方で注意すべきことは、苗字を遠軽にした場合、下の部分なるべくありふれたなじみの深い名前にするんですね。道太郎というふうに。練若四郎、江府安子、昼標喬二など、私の小説で、いくらでも例をあげられます。……」

ありていにいえばこういう具合になるう。名前に限らず、会話のやりとりにしても、なぜその部分が不要で説明になるのか、いちいち黒板に記し、皆が頷くまで説明する。

第一期の開講を始める前、「短い期間で何ができるか、といわれれば返す言葉もない。しかしそこに集まった人間が、『文学とは何か』の根元を問いつくせば、少なくとも自分の立つ場所はつかむことができる」と、書いた。

集まった人々が「自分の立つ場所」をつかみ得たかどうか、私の口から軽々しく断言することはできぬが、虚構と現実の關係に自らの楔を打込もうとする姿勢にとつて、期間の短さは必ずしも壁にならないということではできよう。

男女伝習生たちの職業はあらゆる階層に及び（高中小教員、農協、党書記、学生、勤労学生、出版社編集部、果実商、古美術商、住宅公団、地方公務員、無職、スナック店員、県臨時職員、事務員、齒科医、医大生、主婦、電車運転士、食堂経営、不動産管理業、不動産鑑定士、黒板製造業、主婦兼家庭教師、和服仕立、保母、教育公務員、染色デザイン、建築設計業、家事手伝い、機織り、国鉄職員、音楽教師、養護学校教員、市職員、フリーライター、中学三年生）、年齢もまた十四歳の少年から七十三歳の黒板製造業者まで、それこそ千差万別なのだが、共通していえることは生きる意味を問いつくそうとする執拗な熱情であつた。

ひとりひとりの生活体験と資質が異なるのは当然なのだが、ひとしなみに彼等は優しく、他人の苦しみを理解しようと務めた。

真面目過ぎる人間ばかりが集まつてきた、といういい方が大袈裟ではない程、彼等は真剣で、見せかけの理屈からはまったく遠い距離にいた。

一期と二期、夫々正味六日間の講義と演習を通じて、私は「現実と真実の關係」を繰返し、口が酸っぱくなる位説きつづけた。一日に三時間、そのうち二時間黒板の前に立ち、一時間を伝習生が課せられ

た題の作文に取組むのである。

比較すると、一期は思想に重点をおき、文学に焦点をあてたのが二期の特徴ということになるのか。一期と二期、合わせて出席した青年はむしろ逆の傾向であったと感想を洩らしていたが、一期を踏まえての二期生と、初めて佐世保にきた人々のどちらにも充足する方法をひたすら考えたのである。

むろんカリキュラムの素材はまるっきり違うものを使用した。一期生で二期にも参加したものが七名おり、同じ語り口では退屈してしまう。三期、四期と、伝習生の重複は免れぬと思われるので、準備するノートはむろんその都度新しくしなければならず、五期以降は二つのコースにわけらる必要がでてくるかもしれない。初めて集う人々と、二期以上重ねてきた者のために。

ただし、どうしても想像力と技術の核心に触れる部分について、同一素材が必要な場合、あえてそれを使用した。しかし、それはごく一部分である。

二期のカリキュラムについていうと、次のような構成になっている。

小説（文学）とは何か（一日目）。モチーフ、テーマ、ストーリーについて（二日目）。想像力と技術（三日目）。わかりやすさとわかりにくさ。詩の問題（四日目）。……

二時間の講義を終えると、伝習生たちは必ずペンを取らねばならない。一日目の演習課題を参考までにあげると、「どき廻り一座の女優が売春容疑で検挙された。座長も売春斡旋で土地の警察で取調べられている。そこで刑事の尋問と座長の受け答えを一切の説明を附さず、会話体で書け。なるべく自分の主人公の育った土地の言葉で書くのが望ましい」（二期）というものであった。

二期ではもう少しそれを単純に「街頭に立つ売春婦と客のやりとり」にしてみた。一期の場合、ひねり過ぎた部分に、殆どの伝習生が神経を使い過ぎていたからである。

「嘘つき」「市場」「血」「五十枚の短篇を構成するつもりで、その書きだし部分を記せ」それに「詩」等